# デザインのある光景

Number: 22

Subject:
Kukaisenun
Text:Yoshiko Taniguchi
Photo: Kyoko Omori

10月にリニューアルオープンした北九州空港の「ラウンジひまわり」を訪れ、小倉織を使ったアートパネル「空海扇運」を見たとき、すぐ頭に浮かんだのは「ふさわしい」という言葉。空の玄関口にある、上質であるべきラウンジを、同市が誇る伝統工芸が凛とした存在感で旅人を迎え入れる。華美な演出はあえて排除され、立体的な視点を取り入れた設計の妙と、照明を使ったシンプルな演出が、小倉織の気高さを際立たせ、ラウンジをより洗練された空間へと昇華させる。空間と作品が存在価値を高め合う、極めて幸せなケースではないかと、深く感じ入った。

美しいたて縞が印象的な「小倉織」は、かつて武士の袴や帯として織られた、丈夫でなめらかな木綿の布。350年以上にわたり豊前小倉の地で紡がれていたが、昭和初期に消滅。しかし、骨董屋で偶然「小倉織」の端切れを見つけた染織家・築城則子さんが分析・研究を重ねた末、1984年復元に成功。以来、幻の織物は再び歴史を刻み始め、今や優れた織物として国内外で高く評価されている。

「小倉織」を薄く加工した鉄板に貼付し、幅7m、高さ1.7mというパネルにしたのは、先述の築城さんと、台湾生まれ・イギリス国籍をもつ建築家YANG HEN CHEN(ヤンヘン チェン)さん。過去に台湾で仕事をした二人は、互いの美意識を認め合い意気投合。以来、タッグを組んで革新的な作品制作に挑戦しており、「空海扇運」はその一つなのだ。

深い藍色と縞模様で宇宙空間を表現した『藍輪舞』を、扇面状に展開したモダンなデザイン。築城さんは「扇は末広と呼ばれ、開運・繁栄を意味する縁起の良い形。安全第一である空港から、運気をはらんだ風を起こしてほしい」という想いを込め、そこに「小倉織のシャープな雰囲気を最大限に生かしたい」というヤンさんのこだわりが共鳴することで、縞模様の美学と大きな可能性を表現することに成功している。

世界観を共有でき、且つ建築家の視点で立体的表現を得意とする、心強いパートナーを得た「小倉織」。多くの「ふさわしい」環境で、クールな輝きを放っていくであろう今後を、引き続き注目していきたい。